

夏子の地球の歩き方

第2章 フィリピン・コスタリカ編

タジキスタンから帰国し、様々な経験の記憶がまだ鮮明なうちに、現地で感じた疑問などを明確にしたいという気持ちが強くなり、私は大学院進学を考えた。今後のキャリアを考える上でも、最低限修士までは必要であるという実情もある。そんな中、タジキスタン滞在中にすでに気になっていた大学院があった、それは国連平和大学という大学で、キャンパスは中米のコスタリカ。中米で唯一軍隊を持たない国で、世界中の学生と平和について学ぶ大学院大学だ。また、アジア人を対象とした奨学金プログラムを日本財団が支援しており、そのプログラムは 19 ヶ月間の間、最初の数ヶ月をフィリピンでアカデミックな英語訓練、その後コスタリカの平和大学で専門を学び、最後に2ヶ月のインターンシップを行なうというものだった。ビジネスと開発の関係を学べるかは分からないが、奨学金をいただきながら、フィリピンとコスタリカという私にはまだまだ未知な地域で現地を直に感じながら勉強できるというのは、いわゆる先進国の快適な場所で発展途上国について考えるよりも、非常に魅力的であった。結局こちらに応募し、合格の通知をもらい、平和大学への進学を決めた。

多様な英語との出会い

私が始めて足を踏み入れた東南アジアの国フィリピンは、私が少し慣れてきた空気の乾いたイスラムの国ではなく、じつと暑い常夏のカトリックキリスト教の国だった。道を歩けば、マンゴー売りの少年が必至でマンゴーを売ろうとしてきたり、ジプニーと呼ばれるド派手な乗り合いバスがクラクションをひっきりなしにしている混沌とした町に約4ヶ月ほど滞在した。プログラム参加者は14カ国から30人。カンボジア、ベトナム、ミャンマー、タイ、フィリピン、インドネシア、韓国、日本、中国、キルギスタン、カザフスタン、モンゴル、ネパール、スリランカであった。最終的に私の生涯の家族となる仲間だ。彼らと会ったばかりの頃は、毎日頭がいっぱいになった。まず、コミュニケーションにみな英語を使うのだが、それぞれのアクセントが非常に多様で、ベトナム人やネパール人の英語などは半年くらい明確に聞き取れず、非常に苦労した。アメリカや英国の英語だけでなく、色々なアクセントの英語に対応できるようにするのも、国際的な場では非常に重要なことだと思う。



写真1:国際選挙監視団として大統領選を監視した。フィリピン選挙管理員の方と。

この仲間の紹介だけでもエッセイがかけるほど多様で、経験豊富な人ばかりだった。医者、学校の先

生、カウンセラー、警察という専門職に加え、既に国際機関での勤務経験のある人も多かった。私の経験など本当にまだまだ薄っぺらく思えた。英語の授業は時事問題の聞き取り、プレゼンテーション、アカデミックライティングなど、コスタリカでの英語の授業や課題について行けるようにクラスが組まれていた。それに加えて、フィリピンの政治経済の教授による講義など英語以外の授業も含まれた。そこで、フィリピンの過去の民主化運動や現在のフィリピンの情勢などを学ぶ機会にもなった。ちょうどそのころ大統領選間近で、私たちは特別に国際選挙監視団として選挙に立ち会うという機会ももらった。これは本当に現地にいるからこそ経験できたことだ。また、町を歩けば何でも売っている大型ショッピングモールの裏で、裸足で走り回る子どもたちやお金になりそうな廃材を集める子どもがいるという、フィリピンの格差社会の現状を生活しながら知る事ができたのは、おそらく日本や他の先進国にいながらフィリピンの説明を文献で読むよりもずっと勉強になったのではないかと思う。(もちろん、経験が全てではなく、しっかりと考察された文献を読むことは大事だ。)

フィリピンでの英語研修

英語の授業とはいっても、一人で必死に英語を学ぶのではなく、グループワークが多かった。5人くらいのグループであるテーマ例えば「児童労働」について発表したり、難解な学術文と一緒に読み解いて説明するなど、授業が終わった後に夜集まって作業をしたりした。このグループワークはコスタリカでも多く経験したが、これが生徒同士を知る良いきっかけとなるとともに、コミュニケーションの重要性、難しさを知る機会ともなった。自分がうまく貢献できればよいが、貢献できないと受け身なままどんどん進んでしまうのだ。

プレゼンテーションは日本人がもっとも不得意とするものではないであろうか。少なくとも私はそうである、根っからの恥ずかしがりやというのはエッセイの冒頭に書いたが、こういった時にはその素性ができてしまう。人前にでると頭が真っ白になるし、加えて英語で話さなくてはならない。それに比べ、英語が上手でも上手ではなくても堂々としているクラスメートには尊敬する。そのため、プレゼンテーションのクラスで、1分、5分など時間を決めある一定のテーマを時間内に話すという訓練をしたことで少しは慣れることができた。

フィリピンでの英語の訓練の集大成は、自分で書いた英語の学術論文をみんなの前で発表するというものである。文献の探し方から、学問的文章の書き方、出典の引用の仕方やルール、著者プロフィールの書き方、要約の書き方など習ったもの全てが詰まった論文である。私はフィリピンと日本の間の人身売買とその政府の対応についてをテーマにした。プレゼンテーションも前置きから始まり、制限時間内に結論にたどり着くように練習した。たどたどしいながらも最後迄発表する事ができた。皆の発表を終え、無事フィリピンでの全コースが終了した。初めての英語での学術発表。みな、少し自信をつけて専門を学びにコスタリカへと旅立った。

コスタリカへ到着

コスタリカに到着、全ては一気にスペイン語の世界になった。アジア14カ国から来た30人はここで、もっと広い世界に出会うこととなった。フィリピンでは比較的近くに住んで、いつも一緒だったアジアの学生もそれぞれ、ホームステイをしたり、間借りした部屋に一人暮らししたり、ルームシェアをしたり、ばらばらになった。それに加え、エクアドル、パナマ、アルゼンチン、コロンビア、アメリカ、カナダ、フランス、ナイジェリア、ウガンダ、ルワンダ、イギリスなどなど全部で約50ヶ国の新しい友人が加わった。

私も、一軒家をイギリス人、キルギス人、カザフ人、コスタリカ人とシェアし、一部屋を私の部屋として使い、キッチン、シャワー（2つ）、冷蔵庫を共有する生活が始まった。



写真2：コスタリカでのクラスメートと

コース授業開始！

コスタリカでの私の選択したコースは **Responsible Management and Sustainable Economic Development**（責任あるマネジメントと持続可能な経済開発）という平和大学でとても新しい学科だった。経済の基礎や開発と平和、環境と平和、持続可能な発展、マネジメント、CSR（企業の社会的責任）に加えて、ジェンダーや人権などのクラスも受けることができた。平和大学ということもあり、基礎コースは専攻に関係なく、平和学

である。「平和となにか？戦争がないことだけで、平和と言えるか？では独裁政権の上では平和なのか？」などなどから話は始まる。自由なディスカッションの途中、先生のファシリテーションが入る。先生があれこれと教えるのをノートに取る訳ではない。あくまで、話は生徒が持ち寄る話・意見に基づいて進行する筋書きのない授業だ。日本の教育にどっぷり浸かってきた私は、ここでも持論や意見を展開することができない自分に非常に無力感を感じた。時々思い切って意見を言ってみるが、一言のセンテンスではなかなか十分に伝わらず、悔しい思いもした。発言する時は、結論を言ってから、なぜそう考えるのかを論理的に説明しなくては納得してもらえないのだ。

通常、事前に読むべき英語の文献が約20ページ時には40ページ近くある。まずはそれを読んだ上での議論となる。だから、読解力もクラスでの発言に大きく関わる。前提となっている文献を読まなければ、意見をすることも難しいからだ。また、それに加えて小論文などの課題が重なる。授業での疲れと、課題の重荷で次の日のための文献を読んでいる途中で寝てしまうということも度々であった。

もちろんそのしわ寄せは翌日やってくる。英語圏の生徒は比較的課題を早々に終わらせて、海へ遊びにしている人もいたが、私も含め英語圏以外の生徒はコスタリカという美しい土地にしながら、なかなか頻繁には週末も遊びにいけなかった。時々長い休みの間に美しい森や、海に遊びに出かけた。中米でも安全に関しては良いこともあり、比較的自由に外出できたのはやはりコスタリカのいいところだった。

全ては生徒主体

平和大学は日常の活動も生徒主体である。課外活動は、何かが得意な人が自分でサークルを立ち上げる。例えば、ヨガの得意な人は自分でヨガサークルを作り、週2回キャンパスの芝生の上で開講していた。他にもサルサダンス、語学、ジャーナリスト出身者によるコンゴ内戦に関する啓蒙活動や勉強会、女子サッカーなどなど、それぞれの才能を持ち寄ってお互いに教え合うのである。私はサルサダンスやヨガ、そしてブロードウェイで仕事を



写真3：朗読劇の後で出演者と。(著者は左)

していた生徒が中心になって作られたジェンダーに関する朗読劇「Virginia monologue」に参加したりした。それは私のコスタリカ滞在中の素晴らしい思い出になっている。

世界を知って日本を知る

授業中には私が日本を全て知っている存在とされるため、「じゃ、日本ではどうなの？」と聞かれることも多い。日本の環境政策、日本企業のCSR、日本におけるジェンダーや、平和の問題について説明するのはある意味、明確に貧困や戦争といったもののある発展途上国の状況を説明するよりも難しいと思った。例えば、パレスチナの状況に比べれば、日本においては一見非常に平和に感じるが、良く見ると、武力紛争は起こっていないものの、過去の戦争以降未だに中国や韓国と政治的、時に社会的軋轢が長年続いている。それを説明するのもそうたやすいことではない。日本は男女の機会均等に関してもいまだに世界で低いままだし、開発や資源の確保という名の搾取による自然破壊などを海外において起こしているのも日本を含めた多国籍企業であったりする。そこで、今まで遠くの国の発展や改善を願っていた自分がもう一度日本の問題、平和、日本社会をより良くすることについて考えることとなった。おそらく、それぞれの国のクラスメートが自分の国を良くしようと学んでいる姿にも刺激を受けたのかもしれない。最終的には当事国の人がその気にならなくては、国を良くするなんてことはできないのだ。もちろん国際協力は継続していくべきだが、外国人はやはり外国人であり、サポートすることはできても、限界があることを認識する必要がある。さらに、日本を良くする事は他

国を良くすることにも通じると考えるようになった。このように、私の大学院生活はまさに世界を知って日本を知ることであったかもしれない。

つづく